

Graduate School of Foreign Language Education and Research

外国語教育学研究科

千里山キャンパス

外国語教育学研究科ウェブサイト http://www.kansai-u.ac.jp/Gr_sch/fl/

博士課程前期課程

外国語教育学専攻

外国語教育学領域

異文化コミュニケーション学領域

通訳翻訳学領域

博士課程後期課程

外国語教育学専攻

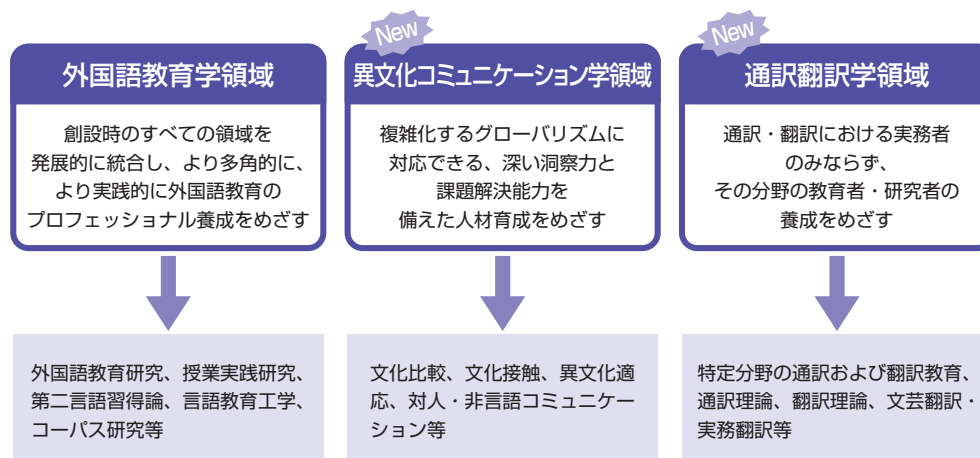
外国語教育・異文化コミュニケーション・通訳翻訳分野での
指導者・研究者育成をめざす全国屈指の学際的研究科

特色

扱う学問領域がすべて学際的な分野であることを生かして、前期課程に関しては、出身学部・学科を問わず、広く学生諸君を受け入れている。関西大学出身者はもちろんのこと、それ以外の大学の出身者も多く在籍しており、多様なバックグラウンドをもった学生が集う研究科といえる。また、リカレント教育にも力をいれており、昼夜開講制、土曜開講、3年在学制（前期課程）、1年制修士（現職教員対象）、集中講義などを導入し、社会人が学びやすい研究科を作り出す努力をしている。学生選抜（入学試験）は面接重視で、高度な外国語能力を証明する資格を有する受験生には、外国語試験が免除される。

博士課程前期課程

新領域の設置



博士課程前期課程では、外国語教育学に関わる3つの領域（外国語教育学・異文化コミュニケーション学・通訳翻訳学）において、指導的立場で活躍できる、理論と実践のバランスのとれた指導者・研究者・高度職業人の育成を目指します。

外国語教育学領域

外国語教育学を体系的・包括的に究め、実践に活かすために、教授法や授業実践を扱う科目、学習者論・第二言語習得論などを扱う科目、各種メディアを利用した教材開発を扱う科目、専攻言語の体系と運用の分析を行う科目などを配置。

異文化コミュニケーション学領域

異文化コミュニケーションを学際的アプローチで考究するために、さまざまな学問分野の視点でコミュニケーションを考察する科目、専攻する言語が使用される地域の言語や文化を深く考察する科目、異なる文化の接触と文化間の交渉を考察する科目などを配置。

通訳翻訳学領域

通訳翻訳理論を踏まえた実践と教育を追求するために、通訳翻訳学の理論的背景を扱う科目を中心に、実践の場におけるさまざまな問題を扱う実習的科目などを配置。

これに加えて、前期課程では3領域共通の「支援科目」として、基礎的な研究方法を学ぶ「基礎研究法」諸科目、また、専攻する言語の高度な運用能力を養成する実習系の科目を配置して、調査・分析・報告・発表などの学術的活動を行うために必要なスキルを身につけます。

博士課程後期課程

博士課程後期課程では、オリジナルな理論的・実証的な研究を遂行し、国内はもとより国際的にもその成果を問い、当該分野の発展を促すような能力を身に付けた人材を養成できるよう、教育課程を領域には分けずに、個別型のチュートリアル・カリキュラムを提供し、入学時に明示した学位取得要件を一つ一つクリアさせながら、博士論文の作成まで指導を行います。

「学びの意欲」に応える学修環境

社会人の方のために

昼夜開講制

授業科目の開講時間を4時限目以降に設定し、主に6時限目と7時限目に授業を展開しています。

4時限目 (14:40~16:10)

5時限目 (16:20~17:50)

6時限目 (18:00~19:30)

7時限目 (19:40~21:10)

- 土曜日は2時限目 (10:40~12:10) から授業を開講します。夏季および冬季には集中講義もあります。
- 時間割表は研究科ウェブサイト「カリキュラム」でご覧いただけます。

長期在学制度 (3年コース)

社会人の方や外国語関係以外の学部出身の方が、余裕をもって履修する際にお奨めの制度です。

- 1年間で履修できる単位数は少なくなりますが、2年間の授業料で3年間で学することができます。
- 1年次終了時に所定の条件を満たした場合、3年コースを2年コースに変更することができます。

※この制度は博士課程前期課程において適用できる制度で、入学試験出願時に選択していただきます。

現職教員1年制コース

現職教員1年制コースについては、高度な能力を有する英語教員の養成を目的とした、1年間で修士号を取得できるコースです。現職の英語教員やその経験者であって、英語教育に関わる業績が顕著な方を対象に募集します。出願資格等の詳細は学生募集要項をご覧ください。

グローバルに活躍したい方のために

エモリー大学への派遣 (日本語教育学・英語教育学)

修了生・在校生を米国南部の名門エモリー大学へ Emory Fellow として最大2名派遣しています。現地では日本語教育に従事しながら、エモリー大学での大学院科目も履修できます。



メッセージ

有吉 俊 さん

博士課程前期課程
2012年4月入学
入試種別：飛び級入学試験



将来、英語科教員になるため、高度な専門知識を身につけたうえで教壇に立ちたいと考え、「飛び級入学試験制度」を利用して大学院に進学しました。

数ある大学院の中で関西大学大学院外国語教育学研究科を選んだ理由は、外国語学習・教授に関わる様々な理論が学べるとともに、学校の生の授業を視察できるなど、教職に向けての実践的なカリキュラムが用意されているからでした。

入学後は、様々な年齢やキャリアを持つ仲間に出会っているため、私にとって未知の世界や経験談に触れることができ、授業以外にも得るものが多い生活に大変満足しています。

外国語教育学研究科をめざす方へ

将来英語などの外国語や日本語の教員になりたい方にとって、大学院で理論を身につけることは、教壇に立つにあたって自分の指導法の礎を作ることにつながると思います。また、教員以外の進路をめざす人にとっても、これまで外国語の勉強をしていてうまくいかなかったことや疑問に感じていたことを研究テーマにすることにより、解明していく過程が社会にでてから後も多様な職業における問題解決能力の涵養につながると考えます。

高度専門職業人を渴望する現代社会で、プロフェッショナルとして活躍する力をつけるためにも、みなさんの夢を実現するためにも、私たちと一緒に、本研究科で刺激と成長の連続の生活を過ごしましょう。

◆2014年度 研究対象言語別演習担当教員

担任教員に変更が生じた場合は、関西大学大学院ウェブサイトでお知らせしますので、出願前にご確認ください。

①専門分野 ②教育・研究テーマ/志願者へのメッセージ/最近取り組んでいること等 ③主要著書 ④E-mail ⑤URL

英語

宇佐見 太市 教授

- ① 仮想現実の装置としての「文学」の実践的效果を念頭に置き、「英文学」と「英語教育学」との融合・統合によって生起する新たな「学知」の考究と構築。
- ② 閉塞した時代の現代人に私たちはどう手を差し延べればよいのか？心の枯渇によって自滅の道を進んでゆく現代人にとっての癒しと復活の道標は何か？英文学と英語教育学との融合によって生じる「知見」の体得を志向する。
- ③ 単著：『ディケンズと「クリスマス・ブックス」』、共編著：『楽しめるイギリス文学』、共著：『イギリス文学評論Ⅳ』、『イギリス小説入門』、『プロンテ文学のふるさと』、『ヴィクトリア朝の小説』、『英米文学と戦争の断層』

染谷 泰正 教授

- ① 通訳翻訳学（理論研究、教育方法論、語学教育への応用研究）、言語情報科学、コーパス言語学、ESP研究、マルチメディア教材開発
- ② If you wish to carry out research in one of the following areas at the KU Graduate School, please contact me directly to discuss your research proposal before applying for admission: (1) Theoretical and/or applied research in Interpreting and Translation, (2) Language and Information Sciences, (3) English for Specific Purposes, and (4) Corpus Linguistics (i.e. corpus-based studies on any areas/topics related to (1), (2) and (3)).
- ③ 染谷泰正 (2012) 『同時通訳はなぜ可能なのか～同時通訳の認知・言語学的メカニズム』関西大学外国語学部紀要第6号 (pp.85-118)
- ④ 染谷泰正 (2010) 『大学における翻訳教育の位置づけとその目標』関西大学外国語学部紀要第3号 (pp.73-102)
- ⑤ someya@someya-net.com
- ⑥ http://someya-net.com

八島 智子 教授

- ① 応用言語学（第二言語使用の情動的側面、第二言語習得の社会文化的側面）異文化間コミュニケーション論（異文化接触、アイデンティティ）
- ② 外国語でコミュニケーションを図る心理の研究、文化心理学的な方法論を用いたアイデンティティ研究、異文化接触がもたらす言語発達や心理的变化の研究などに取り組んでいる。
- ③ 『第二言語コミュニケーションと異文化適応』多賀出版『外国語コミュニケーションの情意と動機』関西大学出版『異文化コミュニケーション論：グローバル・マインドとローカル・アフェクト』松柏社（八島智子・久保田真弓）
- ④ yashima@kansai-u.ac.jp
- ⑤ http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~yashima/

吉澤 清美 教授

- ① 応用言語学。言語プログラムの中のテストングの役割、信頼性、妥当性のあるテスト作成プロセス、L2リーディング、特に、多読、読解不振者の指導などを研究している。
- ② 多読を通して言語獲得が起こるメカニズム、fluency、読解力などの経年的な変化の研究に取り組む。外国語での読みを難しくする要因、読みへの関心、読む能力の測定などについての理解を深めませんか。
- ③ 静 哲人、竹内理、吉澤清美（共編著）(2002) 『外国語教育リサーチとテストングの基礎概念』大阪：関西大学
吉澤清美（2000）読解不振者の研究『英語リーディング事典』（高梨、卯城編著）東京：研究社

奥田 隆一 教授

- ① 英語学（語法、文法、対照意味論、語用論）、社会言語学
- ② 英語語法学/正確な英語に関する知識と日本人が苦手な英語の文法や語法を理解させる方法を研究しようとする人を指導する。/最近英語の語法を体系的に説明する「英語語法学」の研究に取り組んでいる。
- ③ 『英語語法学をめざして』（関西大学出版部）『英語観察学-英語学の楽しみ』（鷹書房弓プレス）
- ④ okuda@kansai-u.ac.jp
- ⑤ HP: <http://taka1okuda.wix.com/taka1okuda>
ブログ: <http://taka1okuda.blogspot.jp>
Facebookページ: <https://www.facebook.com/englishusage2013>

竹内 理 教授

- ① 応用言語学・英語教育学（学習者要因、学習方法論）、教育メディア研究（e-Learning、教材作成）、小学校英語、テストング、研究手法
- ② 外国語学習方略、メタ認知、動機づけなどを自己調整学習の枠組みで説明しようとしています。また、中・高用の検定教科書の執筆経験を通して、理論や研究成果を実践に活かそうと考えています。
- ③ (1) 2012. 共編著『外国語教育研究ハンドブック-研究手法のより良い理解のために』東京：松柏社
(2) 2003. 単著『より良い外国語学習法を求めて：外国語学習成功者の研究』東京：松柏社
(3) 2012. 共著『Adaptation and validation of self-regulating capacity in vocabulary learning scale. *Applied Linguistics*, 33, 83-91.
- ④ takeuchi@kansai-u.ac.jp
- ⑤ <http://www2.itc.kansai-u.ac.jp/~takeuchi/>

山根 繁 教授

- ① 英語音声学、英語教育学
- ② 「話しことばの音響・音声分析」、「英語リスニングとスピーキングのメカニズム」、「シャドーイング研究」、「日本人英語学習者の発音上の特徴」、「音声・リスニング教材作成」などが研究テーマです。
- ③ 著書：2001. 『英語音声とコミュニケーション』東京：金星堂234頁
編著：2007. 『ことばと認知のしくみ』東京：三省堂（編集委員会、他5名で構成）407頁
- ④ yamane@kansai-u.ac.jp
- ⑤ <http://www2.itc.kansai-u.ac.jp/~yamane/>

吉田 信介 教授

- ① 多様なメディアを活用した英語力の効果的習得のための方法・開発・効果の検証、ならびに、国際協働・協力の場における英語交渉能力の実践的研究。
- ② アジアの大学生同士が国際チームを組み、リンガフランカとしての英語とICTを活用して、ウィンウィンドコンフリクトを解決後、最終プレゼンを作成する国際協働作業で習得する外国語能力の分析の研究。
- ③ 「音読・シャドーイング指導のためのパソコンを活用した教材作成法（2012）」『国際交流におけるコンフリクトの解決スキル（2011）」『英語プレゼンテーションの指導と育成（2011）」『国際交流イベントのデザイン（2008）」
- ④ syoshida@kansai-u.ac.jp

加藤 雅人 教授

- ① 言語哲学・意味論
- ② 主に言語分析・意味論の分野で、「esseの意味」、「プロトタイプ・カテゴリー」、「メテオロジーとオントロジー」をテーマとしている。/言語哲学は非常に興味深い学問ですよ！
- ③ 著書（共著）『哲学の歴史3 神との対話』（08毎日出版文化賞）、中央公論新社、2008
著書（単著）『意味を生み出す記号システム』、世界思想社、2005
著書（単著）『ガンのヘンリクス哲学』、創文社、1998
論文（単著）『文の意味と情報』、『日本語学』vol.25, no.5, 明治書院、2006
論文（単著）『意味論の内と外』、『中世思想研究』第46号、中世哲学会、2004
論文（単著）『トマス・アクィナスにおけるエッセの意味論』、『哲学』第54号、日本哲学会、2003
- ④ mkato@kansai-u.ac.jp

守崎 誠一 教授

- ① 専門とする「異文化間コミュニケーション学」では、文化背景が異なる人がコミュニケーションする際に生じる問題、その原因、解決法について研究している。
- ② コミュニケーションに対する文化の影響、異文化適応に影響を与える要因、などについて主として量的な研究手法を用いて明らかにしようとしている。
- ③ 守崎誠一（2000）『価値観』『異文化間コミュニケーション入門』西田ひろ子編集（創元社）
守崎誠一（2011）『自己呈示』『現代日本のコミュニケーション研究』日本コミュニケーション学会編集（三修社）
- ④ morisaki@kansai-u.ac.jp

山本 英一 教授

- ① 英語学（意味論、語用論）
- ② 言語コミュニケーションの重要な側面である意味伝達のメカニズムの解明に注目し、特にコンテキストの中でメッセージがいかに伝わるかを考える語用論が専門である。英語教育に携わるための大前提の知識として、言語をどう分析するか研究を進めている。
- ③ 「『順序づけ』と『なぞり』の意味論・語用論」（関大出版）
- ④ ymamoto@kansai-u.ac.jp

日本語

菊地 敦子 教授

- ① 言語学、日本語学、認知言語学、日本語教育、日英比較研究、通訳翻訳研究
- ② 色々な授業を担当していますが、私が研究し続けているテーマは、日本語と英語を分析することによって見られる日本語的なものの捉え方、英語的なものの捉え方を見つめ、言語がどのように人間の思考に影響を与えるかを明らかにすることです。
- ③ 菊地敦子（2004）『COMEとクルの意味拡張における到達点の違い』佐藤・堀江・中村（編）『対照言語学の新展開』東京：ひつじ書房
- ④ akikuchi@kansai-u.ac.jp

望月 通子 教授

- ① 応用言語学、日本語教育学、学習者コーパス、第二言語習得、教材開発、ライティング研究、外来語研究、shadowing研究
- ② ICLEA（学習者日本語作文コーパス、日本語母語話者作文コーパス）の構築・語彙文法分析、日本語学習者のライティング指導研究・教材開発、基本語化した外来語の研究・JSL学習者用教材開発、Phraseology論集の翻訳
- ③ 『英語学習者コーパス入門』（2008、監共訳、研究社、Granger S. ed. 1998）『日本語教育学の新視座』（2003、単著、関大出版）、「基本語化を考慮したカタカナ外来語の学習と教材開発」（2010）『外国語学部紀要6』、『日本語教育における学習者コーパスの構築とICLEA』（2012）『外国語学部紀要7』
- ④ mtkmtzk@gmail.com

❖ 演習担当教員別指導領域一覧

【前期課程】

研究対象言語	教員名	指導領域		
		外国語教育学	異文化コミュニケーション学	通訳翻訳学
英 語	宇佐見太市		○	
	奥田 隆一	○		
	加藤 雅人	○		
	染谷 泰正			○
	竹内 理	○		
	守崎 誠一		○	
	八島 智子	○	○	
	山根 繁	○		
	山本 英一	○		
	吉澤 清美	○		
日本語	吉田 信介	○		
	菊地 敦子	○		
	望月 通子	○		
中国語	玄 幸子	○	○	
	沈 国威	○		
	山崎 直樹	○		
朝鮮語	西川 和男	○		
	熊谷 明泰	○	○	
ドイツ語	高 明均	○		
	高橋 秀彰	○		
フランス語	菊地 歌子	○		

【後期課程】

※後期課程では指導領域を設けておりません

専攻言語	教員名
英 語	宇佐見 太 市
	加 藤 雅 人
	染 谷 泰 正
	竹 内 理
	八 島 智 子
	山 根 繁
中国語	山 本 英 一
	沈 国 威
ドイツ語	高 橋 秀 彰



中国語

玄 幸子 教授
①中国語学・中国語史・中国語教育 現代中国語の形成過程を文字・音韻・語法の面から明らかにするため中国語を通時的に分析することを研究テーマとしている。 ②中国語教育面ではとりわけ語法に関する研究を志す諸君を歓迎します。学習者のモチベーション向上方策もテーマの一つです。純粋な中国語語法研究や中国語歴史文法研究に取り組む人は勿論大歓迎です。 ③ 1.『語録解』研究—李氏朝鮮において中国語口語辞典はいかに編まれたか—、関大出版、単著、2012 2. 老乞大朝鮮中世の中国語会話読本、平凡社（東洋文庫699）、共著、2002 3. 敦煌への道、新潟日報事業社、共著、2002

山崎 直樹 教授

①中国語教育（教材設計、学習者文法）、中国語学（比較統語論、言語知識の可視化） ②取り組んでいるのは次のようなことです。（1）バックワードデザインによる教材設計のシステム化、（2）学習者のための日中対照統語論、（3）統語構造の可視化のための「階層と変数の文法」の開発。 ③著書：『辞書のチカラ—中国語紙辞書電子辞書の現在』（共編著） 論文：「ことばをオモチャのように扱う中国語学習支援ソフトの構想」「学習者用辞書の用例を産出する—オントロジー工学的アプローチ—」 ④ymzknk@kansai-u.ac.jp ⑤http://www2.itsc.kansai-u.ac.jp/~ymzknk/
--

朝鮮語

熊谷 明泰 教授
①朝鮮語学および社会言語学を専門分野とし、言語政策、言語ナショナリズム、バイリンガリズム、中国朝鮮語、朝鮮語教材などを研究対象としている。 ②朝鮮語と中国語・日本語との言語接触と言語干涉、南北朝鮮における言語政策、朝鮮総督府の植民地言語政策、中国における少数民族言語問題、朝鮮語教材編集上の問題点などに関心を持って研究を行っている。 ③『朝鮮総督府の「国語」政策資料』関西大学出版社、2004年 『パスポート朝鮮語小辞典』白水社、2005年 ④kumatani@kansai-u.ac.jp

ドイツ語

高橋 秀彰 教授
①社会言語学（言語変異、ジェンダー論、複数中心地言語論、言語規範）、言語政策論、発音教育論、ドイツ語教育学 ②EUにおける言語政策研究に取り組んでいます。教育面では、リンガフランカとしての英語をミクロ、マクロの視点から取り上げている他、社会言語学の諸問題を扱っています。社会言語学に関心がある学生の受講を期待しています。 ③高橋秀彰『ドイツ語圏の言語政策—ヨーロッパの多言語主義と英語普及のはざま—』関西大学出版部、2010。 高橋秀彰「岐路に立つルクセンブルクの3言語主義」外国語学部紀要、2011、59-72。 Takahashi, Hideaki. "Language Norms." <i>Sociolinguistics — International Handbook of the Science of Language and Society</i>. (Eds.) U. Ammon, N. Dittmar, K. J. Mattheier and P. Trudgill. Berlin: Walter de Gruyter, 2004: 172-179. ④hideaki@kansai-u.ac.jp

沈 国威 教授

①語彙学、特に日中語彙比較対照研究、外国語語彙教育、日中近代語彙史研究、近代日中語彙交流に関する研究 ②日中語彙比較対照、語彙教育に関する研究のほか、近代日中語彙交流について研究をしている。特にここ数年、現代中国語の語彙体系の形成とその特徴について多数論文を発表している。 ③『近代日中語彙交流史』笠間書院、1994、改訂新版2008、韓国語版2012；『電脳による中国語研究のススメ』白帝社、2000；『近代中日詞彙交流研究』中華書局、2010；『日中同形語小辞典』白帝社、2011 ④shkky@kansai-u.ac.jp ⑤http://www2.itsc.kansai-u.ac.jp/~shkky/

西川 和男 教授

①中国語語学 中国語教育 ②如何に早くピンインと実際の音とを一致させるか？各文法事項をどのように他と区別しながら説明するのがよいのか？など、「日本人に対する中国語教授法」を模索している。 ③翻訳書 「中国語の誤用分析—日本人学習者の場合—」関西大学出版部
--

高 明均 教授

①朝鮮語学・語彙意味論 ②語彙意味論に関心を抱いており、語源的に類似点の多い朝鮮語と日本語の語彙比較・対照を通じて、効率的な語彙教授法を探索している。さらに、近代朝鮮語文献に対する集中的な研究にも携わっている。 ③「内鮮労働用語集の終結語尾に関する研究」、「韓・日漢字語の同意関係研究」、「近代朝鮮語学習書『隣語大方』研究」、「倭語類解の口訣借字表記に関する研究」、「韓国語教育学概論（共著）」 ④myunggyun@hanmail.net
--

フランス語

菊地 歌子 教授
①フランス語教育、音声学、通訳翻訳法 ②現在特にフランス語の発音指導および評価法について実験、測定、などを集中して実施。今年から来年にかけての主要研究課題は、学習テーマと発音練習を連動した効率の良い発音指導法。フランス語の教科書を執筆中。通訳の分野では国際会議などで通訳者として活動し、通訳養成にも参加。 ③『フランス語発音トレーニング』白水社、2010 「母音梯形と母音三角形—発音指導と評価」『外国語学部紀要』第8号（2013）、pp.23-43